

不幸な週末

三三〇円

昭和三十八年十月二十五日印刷
昭和三十八年十月三十日発行

著作者 佐野 洋

発行者 角谷奈良雄

発行所 株式会社東京文藝社

東京都新宿区払方町一

振替・東京二一七五七

電話・(三〇)二五五〇

不幸な
週末

目次

第 I 章

五

第 II 章

三

第 Ⅶ 章	第 Ⅵ 章	第 Ⅴ 章	第 Ⅳ 章	第 Ⅲ 章
二七	一八五	一五	二七	二

外装

斎藤三郎
デッサンより

第 I 章

1

周囲の壁が鏡になっているため、店の広さは何倍かに見える。その壁際の席、つまり鏡のすぐ脇に悦子は坐っていた。

テーブルのコーヒー茶碗は、すでに空になっている。コップの水も、何回か注ぎ足されて、いまは、口に運びたくもなかった。通路を通るウェイトレスたちの視線が、気になってしかたがない。

腕時計を見た。八時十二分。へあと八分経つと時計は泣顔になるが……

しかし、泣き顔になりかけているのは、悦子の方であった。七時半から、この席に坐って待っているのに、上月はまだ来ない。四年前の上月は、時間を正確に守る方だったのに……。

悦子は、ハンドバッグから、電報を出して眺めた。

『一二ヒゴゴ七ジハンギンザメルトンデマツ」コウツキ』

電報の読み違いをしてはいなかった。今日が十二日であり、この喫茶店は銀座のメルトンである。出がけに電話帳で調べた限りでは、銀座には、『メルトン』という喫茶店は、一軒しかなかった。

それにも拘らず、上月はなぜ来ないのか？ 悦子は、焦立たしく、店内を見回した。土曜日のせいか、店内は若い男女で一杯であった。彼らは、それぞれに楽しげである。

悦子の席の隣のテーブルでは、四十近い男と、二十二、三才の女とが、肩を寄せ合うようにして話していた。男の眼が、ときどき、不安げに出入口に向けられるのは、知人に遇うのを恐れているためだろうか？

悦子は、彼らから眼を逸らした。《かつての上月も、やはり、あんな眼をよくしたものだ》妻以外の女性と連れ立っているとき、男は、だれでも、あのようにそわそわするものなのか？ そして、それほどに小心翼翼としていながらも、家庭の外に女を求めたいと思うのだろうか？

レジの脇に、赤電話があった。先刻から、客が、ひっきりなしに、それを使っていたが、いまは、ちょうど空いていた。その、電話が空いているという事実に誘われて、悦子は立上った。

十円を入れ、送受器を取る。上月の家の電話番号は、別れてから四年という歳月、その間に彼女自身も結婚したという事情の変化にも拘らず、悦子の記憶に、はっきりと留められていた。手帳を見たりするまでもなく、いつでも、誦じている番号であった。

悦子はダイヤルに手をかけた。

だが、その手は、途中で止まってしまった。《もし、上月の妻が出たら……》と、恐れたのである。四年前、悦子が上月とつき合っていたころ、上月の妻は療養所にいた。だから、彼の自宅に電話をかけることにも、何の躊躇もいらなかった。悦子は、真夜中に、自宅の電話室から、声を忍ばせて、寝ている上月を呼出したことが、何度もあった。

しかし、現在は、上月の妻は療養所から帰っているはずであった。悦子が上月と別れる気になった一つの理由に、彼の妻の病が癒えたことも上げられるのだ。

電話をかけ、上月の妻が出て来た場合、悦子は何と言えよいか？ むろん、適当に言葉を濁すことはできるだろうが、彼女の声を聞かねばならないのが、いやであった。何か、尋常でない言葉が、自分を裏切って、飛出してしまふかもしれないと思った。

悦子は、その赤電話の前で、大きな溜息をついてから、元の席に戻った。そして、そろそろ、切上げようかと思った。《上月には、何か不都合が生じたのかもしれない……》

席に帰ると、反射的に腕時計に目をやった。文字盤は、ちょうど泣き顔を作っていた。《自分の顔も》と思って、壁に貼られた鏡に見入る。そのとき、鏡の中で彼女を見つめている顔に気がついた。

男の顔である。夫と同年輩ぐらいらしい。三十四、五才、或いは四十に近いのかもしれない。樺色

の上衣を着ていた。

二人の視線が、鏡面でぶつかり合った。

「あのう……」と、呼ばれ、悦子はふり返った。ウエイトレスが、そばに立っていた。ケーキ皿を、悦子の前に置く。

「あら？ あたくし、頼まないわよ」

悦子の口調は、とがめるようであった。

「いいえ、これはあちらさまからの……」

ウエイトレスが、慎ましげに上げた手の先には、あの、樺色の背広があった。悦子が気づいたのを見て、彼は席で小さな会釈をした。男の表情には、一種の優しさがあった。

「でも……」と、悦子が言いかけたときには、ウエイトレスはすでに、悦子に背を向けて去ってしまった。

男の席は、丸い卓の三つ先であった。ウエイトレスに何か言いつけて、悦子の方へ近づいて来た。背が高く、肩幅もあった。靴がいかにも柔らかそうであった。

「失礼致します」

自信ありげな微笑を浮べながら、彼は悦子に話しかけた。そして、返事も待たず、悦子の真向いに

坐った。

ウエイトレスが、先刻まで男のいた卓から、彼の飲みかけのコーヒーを運んで来た。

「あのう……。どちら様でしたでしょうか？」

「いや、こういうもので……」

男は名刺を出した。

肩書きがなく、淀川哲二という名が、左隅の方に刷られてあった。記憶の層を探ったが、覚えのある名前ではなかった。

「はあ、何でしょうか？」

「別に、何ということはありません。お嬢さんはお待ち合わせなんでしょう？　ところが、約束の間が来ているのに、相手の人物があらわれない。さきほどから、じりじりしていらいっしやる。そこでまあ、せめて、相手の方が見えるまで、ぼくがお相手をしようと思ひまして……」

淀川と名乗った男は、このように、未知の女に話しかけることに慣れているのかもしれない。きざなせりふを、少しもてれずに、まくしたてた。

話の途中で、何回か唇をなめる。そのため、常に唇が濡れていた。

一方、悦子にとっては、こんなことは初めてであった。不思議に、不快ではなかった。或いは、

『お嬢さん』と呼ばれたためかもしれない。

「でも……」と、彼女は作り笑いをしながら聞いた。未知の男に、こういう表情ができるのは、悦子の中にも、娼婦性があるからなのだろうか？「どうして、あたくしが人を待っているとお考えなのでしょう？」

「いや、それは、ごく簡単なことです」

淀川は得意気であった。「ぼくは、お嬢さんが、ここへはいつていらつしたとたん、注目致しました。お美しかったからですが、ただ、それだけではありません。単に美しいというだけでしたら、失礼ながら、もっと美人がいるかもしれません。しかし、お嬢さんには、美しさの中に翳がある。その翳に、ぼくは魅かれたのですね。美しくなることは、美容術が発達した今日では、案外にたやすいことかもしれません。整形手術を受ければ、或いは、おかしめんこでも、大美人になれないとは限らないのですから……。しかし、陰影を持つことは、だれにでもできることではありません。また、持とうと考える人もいないでしょう。これは、その人の全存在をゆすぶるような、大きな苦しみや、悲しみを経験してこそ、初めて備わる美徳なのですから」

淀川は言葉を切った。その流暢な言葉は、悦子の耳に快かった。彼女は秘かに、夫と淀川とを比較していた。《夫にはこういう話し方はできない》夫が、悦子のいないところで、このようにほかの女

を口説いている場面を想像して、吹き出したくなった。《大学助教授の夫は、講義口調で相手の顔を見ずに、どもりながら口説くだろう》

「でも、あたくし、そんな苦しみなど……」

「ええ、そうでしょう。そういう苦しみや悲しみのご経験がないとおっしゃるのでしょうか？ それは当然です。よく、ご婦人の方は、世の中で自分ほど不幸な者はないなんてことをお考えです。つまり、ご自分を悲劇の主人公にしたいというわけですね。そういう人たちには、決して、あなたの持つていらっしゃるような、美しい陰影が備わりません。なぜなら、自分を悲劇の主人公にしようという気持には、甘えがありますから……。そんな甘えを一切拒否して、言い換れば、いま、あなたがおっしゃったように、苦しみを苦しみと感じないほど、ご自分を強く持っていなければ、陰影という、深みはにじみでて来ないのです。いいですか？ ためしに、この店の中をごらんください。美しい女はたくさんいます。でも彼女たちの、何と、底抜けに明るいことか。実に大びらに笑い、さえずっています。最近、こんな女性ばかりが無暗に増えましたなあ……。あ、ところで、煙草を喫っても、よろしいでしょうか？」

悦子がうなずくと淀川はポケットから、見なれない煙草をとり出した。外国煙草だろう。

そして、左手でライターをつけた。器用な手つきであった。

《少し、氣障だな》と悦子は思った。

2

もし、これが平生の悦子であつたら、男のこういう長話を、黙って聞いているようなことはなかったらう。男が話しかけて来たとなんに、

「お人違いではございません」と言つて、席を立てしまつたらう。

だが、このときの悦子は、言わば異常であつた。四年ぶりに舞込んで来た上月からの電報。そして、胸をときめかしながら、約束の場所に来てみると、上月は一時間近くも、彼女を待たして、まだ現われない。胸の中に、大きな空洞ができ、それは尋常な手段では、充められそうになかった。しかもこのまま家に帰つたとしても、家には、だれもいないのだった。夫は、毎週、金、土曜日は松本の大学に出かける。彼は、その講師をも兼ねていた。

《或いは……》と、彼女は思った。《この男と話している間に、上月がやって来ないとも限らない》それまでの時間つぶしと考えれば、それほど苦にはなるまい……。

だから彼女は、淀川と名乗る男の、齒の浮くような讚美にも、黙って耳を傾ける氣になつたのだ。「さて、どこまでお話し致しましたかな？ あ、そうそう。陰影礼讚でしたな。そういうわけで、お

嬢さんのお姿を見たときは、本当に驚きました。失礼とは存じながら、お嬢さんから眼を離すことができないのでした。ぼくは、じっと観察を続けさせていただきました。すると、お嬢さんは、コーヒーを召上りながらも、何か別のことを考えていらっしゃるようだ。そしてときどき、時計をごらんになる。やがて、思い出したように、赤電話のそばにいらっしゃいましたね。しかも、一旦、ダイヤルに手をかけて、おやめになった。そこで、ぼくは一つの推理をしたわけです」

「まあ、どんな？」

悦子の声に、弾みがあった。淀川の言葉は、この店に於ける彼女の行動を正確に再現した。ということは、彼が悦子を、最初からずっと観察し続けていたことを意味している。そして、一人の人物の視線が、絶えず自分に注がれていた事実が、彼女の自尊心をくすぐったのである。《夫は、自分が髪型を変えても、それに気づかないほどであるのに……》

「要するに、結論から先に申し上げますと、お嬢さんは、妻子のある方とデートをなさっているのではないかと、そう考えたのですよ」

「あら？ なぜでしょう？」と、彼女は笑った。しかし、途中でその笑いがこわばった。《まさか、何かを知っているのでは……？》

もし、男がそれを知っているのだったら、彼女は警戒しなければならぬ。

「これは、常識的かもしれませんが、こういう店に、ご婦人が一人でいらっしゃるといのは、極めて稀なことです。そういう方の多くはデートの待ち合わせ場所として、ここを使われるわけです。だから、お嬢さんも、多分そうだろうと、ぼくは考えました。やがて、お嬢さんは時計をごらんになった。これはぼくの考えの正しさを裏付けています。恐らく、デートの相手が仲々来ないので、それを気にしていらっしゃったわけでしょう。そしてつぎが電話です。一旦、ダイヤルを回しかけながら、途中でおやめになったことにも、意味がなければなりません。まあ、いろいろの場合があるでしょうけれど、相手の男性に奥さんがいて、その奥さんが電話口へ出ると困ると、お考えになったのではありませんかな？ 実は、数年前、ぼくもある人妻と恋愛をして、電話に細心の注意を払った経験があるので、こんな推理をしたわけなのですが……。お嬢さん。あなたはさつき、苦しみなど経験していないとおっしゃいました。しかし、お嬢さんの心の隅には、絶えず不安があるはずですよ。何しろ、妻子ある男との恋愛は、他人から祝福される性質のものではありません。常に、人眼を恐れ、いつ破局が来るかとおびえていなければならないのです。だから、恋の喜びと背中合わせに、苦しみがあるはずですよ？ そうじゃありませんか？ お嬢さんの美しさに、翳が伴っているのは、そのためだと思うのですが……」

淀川は言い終えると、何回も深くうなずいた。自分の言葉に酔っているようだった。

悦子の中にあつた暗い記憶の部分が、ぼかし絵のように、胸の中に拡がって來た。《たしかに、この男の言う通りだ。あのころの自分は、絶えずおびえ、悩んでいた。恋は苦しみだった……》《しかし……》と、悦子は意識の方向を、故意に曲げてみた。淀川の顔を改めて眺める。《この男は、何のために、こんなことを言つたのだろう？ あのことを知っていて、ゆすろうとでもいうのだろうか？》

「お嬢さん。ケーキは好きではなかつたのですか？ もし、そうなら、出過ぎたことをして、本当に申しわけありません」

「いいえ、そういうわけでは……。でもあたくし、おなかがいっぱいなものですから……」

「あ、そうですか？ では、無理にお勧めはしません。ところで、お待ち合わせの時間は何時だったのでしょうか？」

淀川は、自分の推理を正しいものとして信じているようだった。

「いいえ、あたくし……」と言いながら、悦子は、また時計に眼をやってしまった。すでに、上月が指定した時刻からは、正確に一時間が経っていた。《もはや、彼が来ることは、諦めなければならぬのか？》

溜息が洩れた。それを、淀川は誤解したのかもしれない。